



五元集

亨

中村俊定文庫
文庫 18
290
2





手もと厚も林檎ハ油て面白
 百日乃あくらあやや洗ひ程
 血毒を弱めけあけや心てん
 氣の血を清あけよとのあふ

七日

解する人の子なるもあふ

山王の氏ありて

神等と天下あや 土くろま
 番附をくらもあの子なるあ
 松原よ田をよあ 昼休を

夏瘦み能因一りも小食し
と食り天地を看する夜衣

高閣挽凉

香藁散夫らあつてそこの草
物幅より宿のさしや一是

蟬をりてあそぶ人

うき舟の涼ふやかしの甲
ぬそくと蓮のちそふ物能

大雨大風

吹降の合羽をそよぐ雨後か

得宵やゆら三見入る者わき

をき井あけのけの橋よ

傘おふ月ふあそすも也

本母さふあめあつたあつ

名月やそ住者のつら了信

名不月

小くくくたつあ月やゆ石浮

雨

弱とあて昼貫指りああ月
川舟の園をふいうつあ

宿新上

上嘉佐野

秋の月やいらさむあつきの男山

水相観の繪と

糸のきまてよめをわらわの秋のこ

名月や居酒のまじりと頬より

得蟹無酒

懈を画てた友這する自に

名月や五のころの松の影

雨

納屋の海西の吹くけあつ月

名月や舟を定むるむら雀

夢うとよめ宗起て月の色

あつき

更にと祿且の斬や枚の月

紀川いづせのあり

きつらうあまはらあつきの月

所思

心よほまほしとあつきの月

名月や金くくひるあつきの友

園のあつ吉茶はらり月あつ

月あつてはたはくお舟りあ

人音や月うんとあつに伏見村

維摩のりし

山のそへ大衆しきり床の月

張良圖

胸中乃共出るるあは月

布衣の月を掬はけふ

ありてあき水の月をやはら

寺

ちの月あはる膾炙するも

名月やうやくあは袖に懐

ホウレツの
鳥帽を座はふはりしはりの

雨倚橋

猿這子あはるるや橋乃月

含杏亭

あま入目を元標やきよ月

風雨

雷は揃はあはるきそ月ん舟

小野川けんきゆうは錢

入月や長芭を袋あはさありん

三日禮をつむはりあ

名くは十歩は錢を握りけり

巴江

聲のれく猿の齒白し暮れ月

舟中よふていをもて寝るは
こころ枝の楫子ゆらるるを

月てんも杖もつふげら小舟は

琵琶の音をよむ

言わば比巴を興へて夜も隔
陽の光よ思ひを酒をこま
灯をききて深まいやすふ
村雨の心をあはれし私酒の耳
をていふる感あをるの十三
より字はるる曹保々秘曲
もはるる人を泣くむとて

すさりもてりつりよとと云
其夜困ある時て酒と色をひ
とあつるものあつてとて好ま
枕を投出たての世情只人
一藝何れやとていふ

十五の酒をのこもとけあのみ

あつて舟よつて舟をいへ
月をこぼす水の氷干す
満るは

かりあつる舟を誰月を舟

所懐 京より

はてあまこころを有きよのこ

母の月をけるふ

あはれまは雨え改乃十三夜

猿泊

ふれまや江尻て三粒湯千之板
葉研てハ粉炊かちすう島の月
住の江や夜芝居さそく浦れと
白玉子芋を交まや然り月
ほの目上の太子れあおれ
去うとすむ茶師が猿泊の
あはれと躍りけり日傘

十三夜を

やよも月あつ初あき木杵寄

国十五夜 お乃良夜ハ
は産あつとを

脚番亮ハ照月をる瀬河舞

平家源氏の
二舞月夜

宿あしのをりては月を寄

柴少のいあつとを

名月や鶴あ人の心世流

名月や人を抱あを膝尻

待鳥山
てよみ満里棹のめえんあ鳥

契不違憲

圀の灯も光るを影や油の月
一休の狂詠自画を写し

甲申律師めは相物をして月并

松前のまひり

後り休り

こころを大根て 秋の月

十六宿ハ儒者と名ふる 海

漬蓼の穂よ 九月を ちあふふ

日十之お

笈の菓子とて 雲の月

病中制禁好

松柳乃串海龍とすや 友

秋の月

ひ浪をわけて 月を けり

宗因の月を くりあつを

芋川 允傍都の二百貫

雲の月 出りけり

物うとち 豆くりり 袖の月

鐘声 客船

名月や 市堂の 鼓を 鳴りて

遊子の 舟ある 松の 花も 江の 月

鷹鳴や弓弛を三れを身がけり

玉津竹隈の事

わのいづつお井の月をおぼれ
いさよひや龍眼肉乃うら衣

上交詰上

平定心したるお籠る月記す

吉野のゆめをせしころ

こよひのしずくをいづよの浮世
せそそちりし縁を

新改の月かん所や九月を

九月廿七の月を惜

る川や大いし海をわ日を

石の家りな

又月や陰を感はる故屋の中
そりや暮るあふい入て笛をす
屋合中いづよ瘦せの風つらり

雨子

散や石をかりの橋もよ
星名くら里お一夢あひま

新居

塀梢より久よか野河
天川けあのはじや一志海り

あふきよめて

硝子をまきりくく星ハ地

付能

刺精も廣くふ羽をりけり
 笑えに花つけや新むく
 二軍取む隣のももあまき
 かしきやあまのふよこ川
 星をやあまのふよこ川
 河一あみやあまのふよこ川
 九柳の治家やあまのふよこ川

地敷りのあつて

星はみや双林塔の鐘の音
 橋と成鳥ハいつき夕あつて

七月朝の鏡前山子

あけて竹垣の鐘も静し相お新
 首花や角立も星はあつて

小娘の生はきききしりけ確

お金持し 龍火の筒のわき音
橋をさるるも 逆橋も 音や
玉川のあふ糸
のわき音

水汲の曉起やすまの 駒

増上寺晚景

馬老む 灯籠使のたふさく

まゝらうらうら ちかひのふさふさ

新水の敷くよりし 湯の傘

弄化生

あしらの子字と 天川

松煙よみも 湯の
袖より 湯の
りの授記 湯の有無 價宝珠
と説せぬ 心をわたりて
衣あり 湯も 湯も 玉やうり

永代島子あそぶ

蕨山中火を 昔のまいけや 玉座

あすうら 門の足合は 親とん

子のおとこ 人や 隣の玉やうり

得平酒

洲の隣あつめや 生糸玉

桐陰下けのりき北阿の如
見る人もよりの竹籠中より
送りもわが 定家の権十文字

千之と 黄葉茶子 ぬきあ

お豆あまののり一山乃二ん片
稻つまやまののり東より西

妻よおれぬき
おれぬきをたもれぬき

らふしむや思ふもらふも 翁も
伴勢の鬼にけしあひなる 躍外
わよの ちや 雷雙の舟志の

舟興

をあり花火百も あまきん
扇的を火よりなる 鬼は

好子よる三節を悼して

お新よるやある 秋のせと
鬼灯のよるをこつや せとの

悼コ齋

其人の辭はし 秋の蟬

投られて けをやりけお撲

よき衣の陣巾やあちらの丸
ト石や志よこよぬおてはお撲

津のいぢかも賣やお撲札
相撲氣を髪月休の夕ふ
山城のすし狭ぬ形や祐西風

遊品抄

本屋や六尺は人唐めつに

中の御より

幸清り要の海つきや昔松

雨後 二句

あまふくる芭蕉のりし
浮明を雷お顔よつふ
其舞の日陰ありあり中夫中
舞の立ちのそよあめあめ物
舞のあやうきをうけても松原

種竹 三年

竹乃色許由りいささおの情

つらきともたはあけり庭の秋

長生を愛野にわたりて
角ふまやいせの魂飼乃花為
置納のりしつ葉や秋の葉
芦の程や瞬きやとておぢん

客至

碧池及少多の埒や葉のむ

暮葉とりふき

好影よふふふふふのうみ
花もとりし佐助の屋乃葉の葉
酢をとあると隣の葉の花盛

三遠ちや納

五箱酒や箱荷よひおぢあま
病のちやほ葉おくおぢあま
頼指やちやいせ人は出包を

野店無看核

足あふる亭らまを新酒小
酒買子りくあまの屋紙

ゆ芽あまて

化野や焼のらじの骨はかり

春日法樂

と来日秋の夜語をりたう山

四所の宮へおぼろにやのあそ
成の刻をかきりやうはれりて

野外夕虫とらふ歌あそ

晴吟や狂ひ志つてはるるの月

相模川洪落水接天

狼の浮木あるやや船のあ

二挺立の帰掉

髪をぬん枕つ連立 星のあ

新既や松子あつみの清園を

こぼらしきの歌あそ

甲斐弱や江さくくと柳おたう

弱や岩あやしく元管根

みの歌あそ 素牛あそ

破きん孫おるを志津をま

あそ長者のあそ

中なる小孫ぬ子あそ人あそ

和みお宅

さし椎の音を伝へし礎りな
奥好の殿やうつくしうらな

きき里小野の虫はるまほりて

吾雨の度毛も持とねりて

華や樹草の阿との眉つらり

あしらのわくくみ扇

関守の心ゆるすや栗かよは

大和のゆかり物りて

泊瀬めふ柿の志のまきを悲ひり

蓋海庭

清流や流柿さりすあは

葦狩や山の阿もこゝろ虚号病

め申の葦うらを

葦花や鼻のそとあゝあゝ

舟中

あし山のつゆまの華めや秋の音

秋のや弱もゆるを鞆の上

稻葉見よ女侍さへすゝこゝろ

焔のそと 瓦上の移をともほり

隅田高橋之記

鏡新瓶

遠野 弱ふ海をぬれ 臨目よ
松虫の 孤をさんれを 友とほし
葉の帯とよせをうりて
好くも 隣をぬれを 友とほし
すむりや 舞をさくさる 菘

夜る山

鈴虫や 松明をてへ 荷をせて
山川や 松をさ 越ハ 阿の帯の
きりて 于 山田の 畔の 夕花

二見めて

岩のくま 小形風塵しとれ 彦

長谷越

山畑乃 幸ほる 阿の 依 務る 系
川昔の 姿を ありて 谷乃 あり
遠別 二役川 幸ほ 阿の 舟よ
り 推 阿の 腕と ありて
逆水 大切 新を ありて
お 權よ 難は 阿の 淵の色
一夜 前裁と ありて
市 切の 阿の 入 阿の ありて

切懸きりして

日盛を常筆とせ萩は汗

をのり店

萩はあまひ分りや甘茶

既松幸

獅子舞の胸分あす萩の萩

楓子幸

あじりぬい推の内併て

井筒を略しる昼よ

いそれろく竹輪をむすの落る

田家

庭をの卵うみ控り萩種系

妻基お福おに窓はまゆ

饑春流野成

荻刈のうらを喰せて破り

隣家よとちとくを

大絃ハ晒にえ語りある雁

元結のぬる君はらち虫の声

お島三郎の貝をとりて

あけ出乃見よりておは新酒か

旁脊月灯を憐

古寺や 洗鉢 ありん所ふ

駿府市番子籠しもの一層の

うらよみ 柳掃くも木洗桶

日仙石玉まふ所があまの鏡の

萩すくや 傘にらに 昔鞆

あつみのうらみのね
花子志太る

三栗のくはちり打や 角被

在来寺まで

信口平の志つらや ちの落るふ

松のそふみの火生ししけ 竹藪

感徴和あるあふに

そを打や 髭衣よ 玉に

品川洗鉤

厚の版見送るまや 舟の上

白をよき 壺の遠海と 敷と厚

ふしめ 喰とめ

野啼や 赤子の 頬を吸時

泥檢よとりし 泥や 百舌の 声

泥象の 時よ 遠よりよみ 小

曳尾

鶯の長上東

うづ花の枝や 女あま

如是果のころを

二子山二子の初りし粟のう

尾の静也まて

燕もおもひはらみうらて

霞園やあまのげし

鹿の一声をりふうら

あまを誰か懐きこぼる鹿の声

はばくやあまをさよらけ流

木下まて

門立の枝くゝある男鹿うま

おあまやおあまをさく蕨の尻

秋葉禪定の所

合おあまをさくあまをさく

下山

あまをさくあまをさく

芭蕉おあまをさく

嵐葉一子孤懸をたそれむ

早のうも芭蕉の秋をわか

菅根

杖の上よりそらんから村の

高雄よりと

く新嘗支覚家をとらせし

泊瀬よりと

松んは云家のあまうらつせ山

山行

な後よお祭はくこ片与の山

いせあて

お祭りし能態の拓といを能う

旅思
卯句

南をやもあつこゝろの山はかく

南天の突を包めと柳原の巻

南天や秋をこはむら小倉山

くらの山乃給ふ

笈の角楯の巻ふ志つれ者り

七十の操もそつ守りつる度

いつしうは稲を于瀬や大井川

山の端を下しあうすや碓氷

水郡

唐鉅を流る巻やあてん

富士

坐あしむ中の夢はさほむ
おきやそむをさるる

背面達しを思て

西帝は八苗守とてし
秋の風

詠思 二行

こつこの指あや水の香

みづくの路ゆく人のせむ

召した訓いさや花の

うらむやも餅くまの

本多下総守の
市代宴

後園

りきぬけの庭や澄摺菊のふ
手の内内敷をたてきく

庭は

駕籠を濡て山吹の菊をこぼす

志保し子たを何ある菊の宿

荷合ははる

土窓のふきいせやきくの菊

きくの菊小侍をきくはら

まくの菊や靴よりあまらあま

白鷺の基石ありてまじくのあり
有重——地子這菊をえおん
こい推子初めのころに 袋菊
素堂 孫菊の屋——
け菊く十の北酒乃亭主あり

昼菊

まじく白く蒼ハ梅ふくねり

葉苑

菊を切花梅のまあうり

水鼻 ふくさめくどり菊梅

病起 千山ヨリ菊ヲ
見

大母衣乃りし ちを柳や桃の葉

三鳴あて、重陽

門酒やる虫の腕乃きくをお

宮川の柳より、酒送せられて

重箱小花あをいけの野 菊が

みちとせのそとに名はむあきくの色
あはあきける子 おりあよりて

ゆつて我七百の所走 菊あるん

竹苑のやもあきをゆき
うつりあきりて花奇あき

出世者乃りつりてあしつくり菊

翁はひその交む子にせり

時服之孫菊あはまき北芭外

十日菊

親世殿十日の菊をかきり

女子を移うひそ

おかけらんじり

かみ屎よりらんりおむの妹が

十日菊

震宴のおアももふ菊膳

笠より西りの曇よ

菊を着てりらさあうぢや

袖の浦より貝にじよ

白菊を貝の内実よせん袖の浦

那波を九折れあつてらんじり

市連さの言釈ともあまひ

大工まの久しお影や神の秋

御高より局あてなりて

御程をえして髪あるおまの

内宮 法神のを拜なるふ

おの妹や赤子もおいるお徳山

おま

日ハ所て古殿ハ旁のかくも所

いつれもくわらあまのり

大しや小判あつて葉のお

や津川よこ

花はよ祭主の恵を送りけり

冠里公ゆけりしすし祝きて

初度や其場を以て百足持

周、蛇、蠱の昼よ

白鳥と一升入乃めく

栗原の妻を渡らふ

かごとすて福原淋りけり

元禄辛未のとく大山榎島へ去信

お川 紀りお書略之

品河もつねおめつし馬の音

とらふ

箱塚の戸塚とつくと田守が

後決

宿よりて来を回やくれお月

いせ原

あゝもや離く乃為麦 畠

御向松よ

生栗を握はめしる 山後村

大山

縁柳や うろ岩根乃りもみら

石窟なる業僧

手み提し茶瓶や けめて草の香

二間茶をまて

白くみ尾髪 吹さるる風

由井、はる

おきふ一のなるおや 母のおと

雪乃下もや せりそ

破らん宿の庭子や 茶乃初仕

羅思た乃古樹のりもて

有一代の供奉の扇や ちる

横儿 追悼

一嶽を子向ふとるや 新巻

酒より初を切懸りしを各

一字を探るや 小田を

あいせそや おををけりての

白画 雁

斤更ハやの 一ノ小田の唇

秋のら北祖父の せりそ

白扇倒懸東海天と云ひける
つまげりてすまふあつてまふ
みきりてつらむせつるこのあひ
をききおほひて山の半腹より
あつてつらむせつるをよりすま
いとんもなむちのりよてし

白雲の西又は流や普賢富士

未曉吟

澄つるよ階子ふ立ててさう菊ハ

洞房の茶を字もまの笛を
あけりりてせつるを悔して

とふつた笛のなるハ蓬屋殿

悼朝豊

以人ふ三百十りのあはれ

吉田氏

唐祖も糸をきしつらむ向井

芭蕉翁十三回

辰子や鳳尾のうねるはらわ

室永三戌十一日廿五
妙貞童女を葬りて
室の落土よかへんも被さしあ

秋世月かろく権くちを
さめや福宮の河流乃秋世日
玉岸落つよそ

師弟をばりてあしりらあそ
高野よそ十月三日

卯塔の花表やけのも秋無月
きくくは斤日かりやあつる
阿事寺けとめあつるあつる
あや葱臺乃 斤柳

芭蕉翁三回

志らくや味も舟泊を墓糸
帆げ舟泊をや豊田のり

遊金岡寺

八五の楠の板ををりしは
蓑を志て遊るををりしは

大和めぐり世比

あゝ時を之輪の近ききり

芭蕉翁病床

吹井よりお話をよす母し時雨

治柿の夕日うかざる少くは

飼猿乃川窓つよふ志くおれ

時雨くも酔下のりりて村霽

しづれはつきの酒を

き麻さむくのゆんま

小松のふかをかに来る山姥

當院の冥室什物すくは

中めも小松との松上り

箱の上子馬蹄さくを硯の

松陰の硯子息を志くおれ

せそちまふりけりけの房を

三尺の力を西河乃一くおが

本多総列公千信廣一く夜
むら雨とひひくくありの
ゆころを後りせよと仰はせ

蝙蝠や柱を揺るか一く連

守山の子ふりてを昔時あが

とく月のおらふて籠りま

あふいぬを清水せを

揚りお危のる女下りまあ

井の流酒匂ハ格とあたり

家こ乃まや居よりと大社

大和らりせり

くらやりの城の寒きやのりの

使者猶書院へ通るすも

井波門主應心院殿

あつとそりみとあふ山乃二集
あつとそりみとあふ山乃二集

風や沖よりききよのすれ

あつとそりみとあふ山乃二集

紅雲の下終もあつとあ

去器とや祖父のくま

く所の者けりあわの子あ

あけぬの浦おのりて

枕ひらりとくまらる網り

幻住菴よりて

雑ぬの名とくらあはれおのり

蕪汁や柔のありたもとぬん

宗隆尼みはるりのあま

千那あふて望田らとて

薬のあまよるる命やせこのお

蜜の刈蕪おくりやんあま

秘薬うけ端のかきや統六針

洗げや祝さのこす能戻り

あつらふとぬもあんなさ切

柳やぐくむ昔の憲法と

霊山のみなと

かおのそりのるをこみ死ぬ指册

生活新五上京より

新の末乃扇あふあつらふ

聖の信のやうけ

祿雅治は徳者るん畑のそ

ほろあ

神楽ふゆとあまらそ舟乃中

志りくくもやれ一枯木乃夕附日

周旋をよめて

うゝひら三井の三王や冬木立

風や勢田の小橋乃花を溜

芭蕉翁をたてまつりて

おを指を子みりそ運やむじりて

石菖の節もあれをや水は常

か生のしゆのふついのをばて

遠くを流すよいらん張縁はた

むし世悲の重荷や奥子お着

起出てる志けり力や足感深中

寐んやららりあらんのさめを中

け子着てらん路中も三片はら

長途狂信

宛の子をくばる際も中井川

目ぼりりを氣おし路中の信世ぬ

山をわぬせら色よの月をき

ゆきあくをば隣をばれきり

け木やや頼のさこれてあのみ

果はや二をあきりて京片夜

新宅 二句

所の場乃か庭めし炭俵
氣ももやをばかしを象

をさあ三十五りよ

か河の川はあふれし袖を納豆汁

霜月朝日の例を

法人や 嵐芝居をを象

あ柳の市店

人をさんしおのこも夕涼

新うせや 暁いさむ下都の橋

お豊老父七十の賀平

白河の海をかたや桐火桶

備別あち地あ一偈のすき

あつ六十年の菜花を粥

澄子きりめて終りを取

ほろりまに神をさるる

や一筆をゆるらみりし

粟飯の焦て、白あや露の声

法雲寺老僧春色とほりり

原舟のや 季吹の家の夷講

はひり片を猫家住あいろ外
罽の白子白のこもや糸の菊
控らん乃為の切やて火おす
鬚の糸木賊のひと東枝より

出ぬのとう其根う(をけ冬構
咆のうせ貝を盃あてたを
と名甘しらりよあせて
炭賣の炭くそをうれえやこを
桐栗老人のま向
山茶をや猫もれくらお盛抱

あく酔あしやせよ浪の句を
开くねて木桶よ流るあつた

山行

山火をうら嶼出に雲おこのち
みとほし知らぬくし池の砂

寒芦画讚

何ふ花しく似家いそけ糸の解
氷もし蓋とららと 鴛の中

住吉しりし

昔の比をともより旅すや冬の海

月防とあり方ありて改
る行くと一生涯ありてひる
をめでし板らとありとや
この甲よりやけら物
ひりひ物

火燧 青燧 燧を拾り

斤身お落し 火神を幸の
ものありと

忠直と所より 火神を
名もこのりとあり

新し
火より 火神のあり

三年成就の目み

燧のや 火をよめる 金の甲

燧のや 火をよめる 金の甲

炭電 三句

炭や子の猫とゆし 卷の目

炭よりや 珍味飛井、新の松

炭よりや 豚の舌 鼻をいん

炭電や 煙を吐けた 猿の舌

かすも 其木葉より 象の舌

うつし 火の南をきけ ちんぽ

切男は 草やく 人ら 其薫に

炭屑の やりし 出る 木おを

とて あい かの 一車とあり 炭

寒蠅炉をめぐる

傍おれてあうあうあう人の蠅

口切や袴のひびくは流薩葡萄

稀津某出田一袋かきり
粉壺の箱まで送付し

ころは吞食お志つゝ一組代さ

つ居安慰

魚くぎの燭を焚きぬや灰せり

山中 高客

袷卷の松みくるや三種の海

並膚ハひく子の蹴や寒作り

十石ハ驚みつくこけりあんさ

冬川や篠のすくすく竹の糸

困倚橋

うけしや澄もあつ橋柱

海幅や氷の中よわさし松

軽いつけしりあけりきほら

煮ゆや篁子の竹乃くす疏

菊文

内蔵の古酒をゆりや室の松

市隅の倚り

宮草をばけしあけりて矢倉賣

揚名あかき色あききほあ
野の色をわたりきこて
野の色や北窓の宸行たよきけ
心もや答よゆきこしきあき
浦御らとてゆ右と 大津時
細衣をよとらるる左の古巻
塩橋子や投てこもよ小磯
よき日れよ月のくまやむし
妹よよハ龍の足のとらるる
薩埵山とて
汐波の猿首むねののちあみ

新て鷹りて地りあき舟
京なる人は案内して
よけ引るいぬはあきこ
滝もやあき控てと池り答
人丸講 月吹よ
沖の帆も十りいこをや候あき
あ國橋上 二句
院の鏡子よとらや寒く念仏
きん屋仏橋をこかれを初も
酒飯の飲酒ハはらるるを答い

去来家まき

千々るらか首河を舟に

ことく九ぬそくやじし津和

南都よのえつ時

寒色や南大門のりあ徳月

ひらち帯のちりりあ

かりひのせなりてく

くはせきう縁起すんて里津棠

お神楽や鼻息白く面の内

雪買ふちを沽まや露の香

清水飲ひあまりて

あーいれ雪の舞臺の目だ気色

知恩院所ふ宿とりて

初雪よおらたうららのあうた

大津おらりもよそ

雪の目や船院との顔の色

ひらちこの宿あて

馬りよ貪りしふ雪の宿

寒山のうん

ゆる恩よ門の雪はくと食外

西運寺興行

初芳お人ものるるの伏ん舟
 赤雪とあつひの程一笠のうへ
 もんやや赤子あつする お龍
 はりやや 雀の枝おの小土意
 門よりお字を留く

琴屋

窓鏡のうき世をぬにゆきん
 官城御普清成能くこ流家
 佛褒美ぬりるをける以

陪臣ハ朱買臣ニ申す乃袖

色蕉を居をさうと

表老ハ魚もあけに 菴のち

門のち梅阿りやとさうさうり

山居の傍り

雪をぬく猿り茶を煮たりた山

かも川は一西れとちみくち

親也とよふ路も雪の黒いふり

ちんをさうちる女のあしを

醉吟

雪うそややりのちをりす小忌衣

望観山

雪雲や大の字枯る山の景
戸障子りかゝる雪色し松乃声
かゝりや竹田へ帰るゆきの音
旅し女土佐をむかへり
人へ平らぐとも

黒塚の容あしらひや 国乃音

立徘徊

げうきや内よぬらふ人き誰
りししいわらばおん直あふ
野川の霧を秋輪よきらんりふ

東師方より雪らんぬらふを
ぬらふ上中

初雪を好やえりてはなもふあ

楠の網壺四回一回や
戸客の唇をくちりせ

もつ雪や湯のこ所の丸網壺

ぬらふ雪をいれとまわたり

半衿の別添もあや雪の松

人も来ぬぬらふ独酌

初雪や十五成るお酒のこし
軍兵を圍焚てまらや雪礫
松の雪をよつこのはらりきり

前よりよ家で雪の白

敵意の人おなりつけよの香

おきかぬ魚のゆきさかあか

出はし

すきよの犬を拂わ袖の雪

あまのあや控てあるふきの宿

市申深

初雪や門を控ある夕ちりき

不分當春作病史

酒おと病を悟はし一の夢は

極月十日西吹大城の月お

いとほしや足袋賣子おしごうの山

新堀めて食らわやうの師走か

餅礼や灯もくく壁の泥

餅と尻と宿つきくくくくく

やうらむを又や狭走馬のらき

書如くをゆきし一冊の巻柱

座右銘

以て和を登りて取らざる覺書
乳母おえて去るも養女を刺志
御前中百殿よりくはり
のりおの中は眠りて

年忘し刈伯倫を向かいきて

震渡流火志のすりて

妹とあやむ薑とけり餅の番
煤掃てぬしおの女房めりりや

京下りまををあるゆり年

おりの猫お回りのあり

以て年の牛はひらり年あつる

臘鬼五つの子を産り樊中よ
やふおをいひておれりけり
年をいひてひり

年をいひておれりけり

すけりひりおれりて世控

童よおれりておれりて煤をいひ

忠信り芳野仕也やあつるはり

おれりて親の悟氣もあつる

用窓は羽幕をめぐ

煤こもるとつもれを人の陸岸に
鼻を掃孔雀の玉や煤こもると
御煤、翁、竹取

千山家と一高小

刻すともやハと女神楽男より
揚屋に酔房して
意の手差紙巻をたたく

身の布をせれをよめし羽織よめ
小伝織りてあかこ〜竹取
山陵のま方を海す〜ふすけ
女子の抱瘡〜けりて

餅の粉や必雪くつる神の味
乃高云百の津無り巻袖
系あけらノをあげらる津菜巻

市隅

弱法師家門ゆきを餅の札
旭影屋の夕日志らけし手抄巻

糸と松あまの市の夕照

自悔 三十

ふもりのこゝろあはれきこむる

大津驛

午觀のふるもせりや

雪窓

損料の史記をゆきの帯の
年の所やひらめのむねの物思
はるや終評定しおめを

